

# 第2章 「自由な創造精神」

From 1940 to 1970s

戦争が終わり、おしゃれを堂々と楽しむことができる時代に。誌面からもんぺが消え、流行を取り入れた服の図案が多く掲載されました。洋服を“作る”のではなく店で“選ぶ”ようになった大きな転換点も、このころ。才能溢れる日本人デザイナーの作品が誌面を飾りました。



1950年8月号

### 「直線裁ちのデザイン」

生地のリズが少ない直線裁ちによる一箇の図案を、モデルカットとともに掲載。戦前まで小誌の編集部員で、後に服飾デザイナーとなる森沢洋子がデザインを担当。図案の掲載は当時のファッション記事とともにマストでした。(撮影＝田村 茂)



1945年12月号

### 「寒いときの衣服と着方の工夫」

戦後初めて迎える冬のための「防寒衣・オーヴァ」の特集。重ね着を考慮して「ラグラン袖のゆるやかな型」を推奨。真綿を刺し子にするなど、防寒の工夫を説きました。しゅれたタッチの絵で、実用性ある工夫をおしゃれに紹介。



1946年5月号

### 「フランスの流行とアメリカの流行」

もんぺを脱ぎスカートを書くようになった女性たちのために、フランスとアメリカの最先端の流行をレポート。ともにウエストは細く、肩をいかにせているのが特徴。スカートは短いので、太っている方は真似しないようにとの助言も。

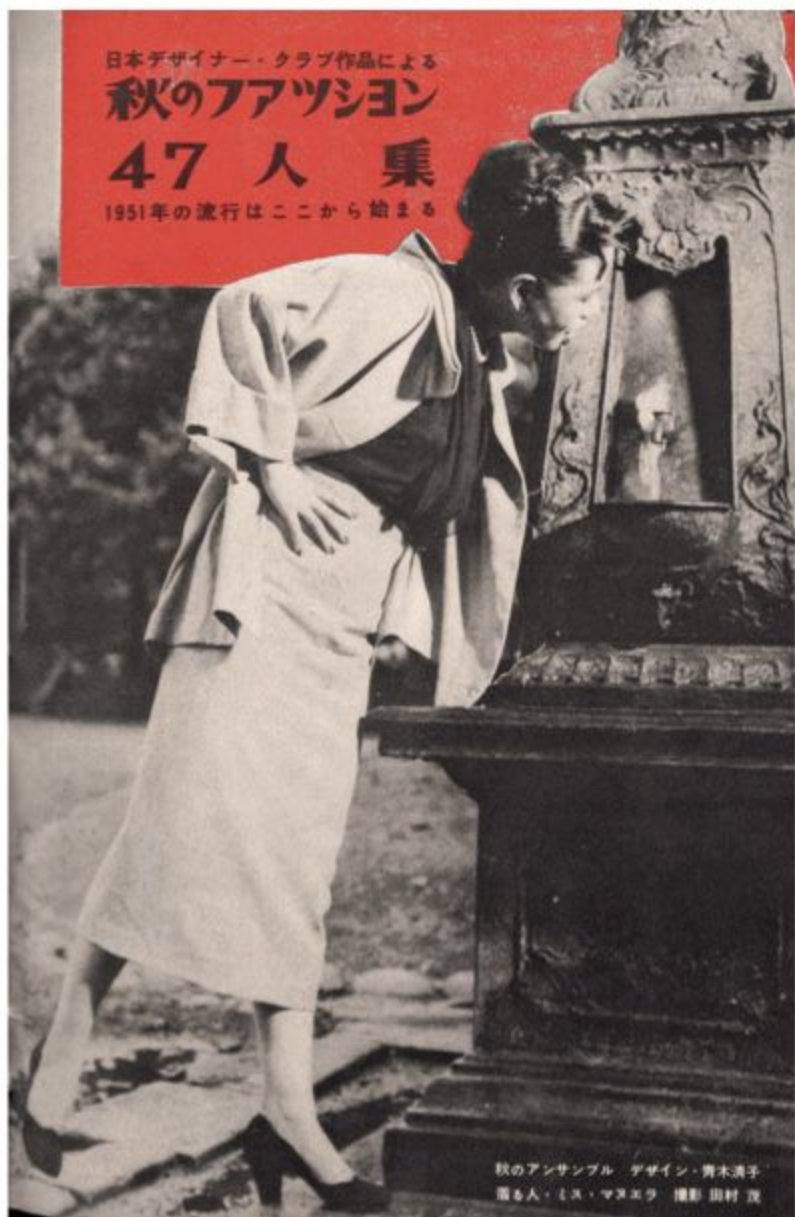
## 新風を巻き起こす 開拓者の出現

文・中野香織（服飾史家）

物資が欠乏していた戦争中、もんぺや着物を補修しつつ着ることを学んでいた女性たちは、戦後、まずそれらをスカートの洋装に作り替えた。更生服。すなわちリメイクである。実用一辺倒の装いから楽しむ装いへと、服装に対するマインドも変化した。洋裁学校も急増した。

戦後初のファッションショーが東京・銀座のキャバレー「美松」で開かれたのは1948年である。その頃、森英恵は洋裁学校に通い、卒業後の1951年、新宿に洋裁店「ひよしや」を出した。

米軍大尉の夫人が店を訪れた時、森はカルチャリーショックを受ける。採寸のため夫人が脱いだ服を手に取ると、服が丸かったからだ。服が丸い。とは、立体であること。洋服は立体であるということを知ったこの日から、森の立体裁断への独学の挑戦が始まる。戦後の日本ファッション史は、平面から立体へという革



1950年11月号  
「秋のファッション 47人集」

大幅にページを割いた大型特集で、当時を代表する47人が新作の洋服を発表。青木清子(上)、マダム・マサコ(左上)、桑沢洋子(左下)など錚々たる顔触れで、各自モデルを替え、誌面上で個性を競い合いました。(撮影=田村 茂)

秋のアンサンブル デザイン・青木清子  
着る人・ミス・マヌエラ 撮影 田村 茂

そのような時代、本格的なファッションデザイナーとして登場するのが、芦田淳である。ファッションデザイナーとは、着る人の現実的な体形よりもむしろ、主観的な美の理想のパラメータを最優先し、表現する服を作る人のことである。芦田は、イラストレーターの中原淳一に師事し、西洋の美の表現方法に磨きをかけていた。裁縫からではなく、イラストレーションから出発した芦田の服は、非日常的な美しさに対する当時の女性たちの渴望に応える。「婦人画報」にも頻出する芦田の既製服は、大評判となり、芦田は1963年、「テル工房」の設立とともに高級既製服の生産を開始する。これが日

### 頭角を現し始めた 若き日本人デザイナー

とはいえ当時、きちんとした洋服を持つとうとすれば洋裁師に注文するのがふつうであった。1960年代まで「婦人画報」には服の図案が多く掲載されていた。洋裁師が、着る人の体形と好みを最優先し、オーダーメイドの服を作っていた。

命から始まるのだ。一方、その頃の「婦人画報」では、和裁の直線裁ちを活用した洋服が紹介されるなど、和洋混合のハイブリッドな洋服も普及していった。  
1953年、パリから「クリスチャン・ディオール」のコレクションが来日、ディオールの旋風が起きる。1954年にはオードリー・ヘップバーン主演の「ローマの休日」「麗しのサブリナ」が大ヒットし、ヘップバーン・カット、サブリナパンツが流行する。日本女性はパリモードとハリウッド映画をお手本として、ファッションに覚醒していくのである。



④ やまと自動車株式会社 いすゞ自動車株式会社



この時代の女性たちの努力が  
未来のおしゃれの基盤に

1960年代中頃には、好景気に後押しされ、日本は世界のトレンドとほぼ足並みを揃えていく。日本のデザイナーも海外に進出する。森英恵は1965年にニューヨーク・コレクションに参加。



1960年5月号  
「婦人画報1960年カー・モード発表」  
森英恵（上）、中村乃武夫（左上）、芦田 淳（左下）らが、車に合わせ服をデザインするという画期的な企画。日産セドリックを題材にした森は「車に合わせて機能性を重視」し、ベルスリーブで動きやすく。（撮影＝福村隆正、河合 肇）



COLOR  
COORDINATE

▶強いルージュの小柄子の九分丈コートには、明るいキヤメル色を合わせました  
▶グレーの窓枠格子のフランクコートにはチャコールグレーのスカートとの配合です  
▶空色と砂色の明るい色調のフィードのコートには、強いトルコ玉の青の配色。  
▶太ネヴィードのコートは、量感をひきたても濃いスカートを組みあわせました作り方252頁  
デザイン/鈴木実子

どなたも、スーツやコートの特もどからのぞく色には敏感ですが、新しい感覚の九分丈コートの下からのぞくスカートの色は、今シーズンの配色のポイントです。コートと同色は万人むきですが、特も強くした配色がより流行の短丈コートとを協調します。

九分丈コートとスカートの配色

1966年11月号「あなたをもっと美しく魅力的にする(色の調和)」

世界基準の流行色を使ったコーディネート提案。「日本のためにアレンジ」し、「世界のモード感覚を身につけるだけでなく、生活を豊かにするために色をどうこなすか」という姿勢は小誌にいまなお受け継がれる精神。(撮影=藤井秀樹)

**エレガンス100の知識**

ドレス

ドレスは、ファッションの中心であり、女性の魅力を引き出す重要なアイテムです。エレガンス100の知識として、ドレスの歴史や着こなしのコツについて詳しく解説します。

1967年9月号  
「エレガンス100の知識」

ドレスに始まり装身具から化粧、マナーまで、「エレガンス」にまつわるアドバイス集。ツイギーの体形の話がトップになっているのが、当時の熱狂ぶりを物語ります。外したときの手袋の持ち方など、細やかな点まで網羅しています。

蝶をモチーフにしたエレガントなドレスが人気を博し、「マダム・バタフライ」と呼ばれて有名になる。アメリカでの成功を受けて、パリコレクションにも進出。ちなみに初めて日本人としてパリでショーを開いたのは、中村乃武夫、1960年のことである。森は1977年、パリ・オートクチュール組合からアジア人として初めて会員として認められた。

1967年にロンドンからツイギーが来日し、ミニスカートの大ブームが起きる。洋服だけでなく、靴、髪形、タイツまでもミニ仕様にするため買い物に励んだ女性たちは、景気を押し上げることになり貢献したばかりではない。憧れの既製服をエレガントに着こなすために体形を整える努力をおこない、ヘアメイクを研究し、美容に勤しむ。「婦人画報」は、そんな女性のマインドの変化に柔軟に対応した。楽しい苦闘を経て、日本女性の体形や顔、立ち居振る舞いは劇的に変化していったのだ。

なかのかわり●研究・執筆・講演活動、および企業の顧問・アドバイザーを務める。昭和女子大学客員教授。ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授を歴任。  
「イノベーター」で読むアパレル全史(日本実業出版社)ほか著書多数。婦人画報公式ウェブサイトで連載中。